

ヴァナキュラー文芸と『北越雪譜』

森山 武

1 はじめに

江戸時代後期の大衆向け出版物がヴァナキュラー文化研究に豊かな材料を提供することは論を俟たない。黄表紙・洒落本・滑稽本などには、多彩な口語・俗語表現を取り込んで都会の市井の人々の生活を描いた作品が多い。それらの戯作本と時代背景や文化的状況を共有しながらも、かなり異なる属性を持っている出版物が本稿で議論する『北越雪譜』（初編 1837〈天保8〉年刊、二編 1842年刊）である。初編の内表紙によれば、「越後塩澤 鈴木牧之編」「京山人百樹刪定」「江戸 京水百鶴画」「江戸書肆 文溪堂梓行」という制作陣。すなわち、越後の牧之という文人がまとめ、それを江戸で山東京山（1770-1858、京伝の弟）が文章の仕上げ、また京山の息子である京水が挿画を担当したということになっている。版元文溪堂は曲亭馬琴（1767-1848）の『南総里見八犬伝』（1814-42刊）なども出した当時の有力書肆であった。近代に入って『北越雪譜』は1936年に岩波文庫入り。以来2020年現在まで71刷、累計24万4000部発行という人気作品となっている。その岩波文庫はこの本をこう紹介している。

美しく舞い散る雪も、ここ北越塩沢の地ではすさまじい自然の脅威となり、人々の暮らしを圧迫しつづける。著者牧之（1770-1842）は、雪とたたかい、雪と共に生き、雪の中に死んでゆく里人の風俗習慣や生活を、雪国の動物と人間のかかわりや雪中の幽霊のような奇現象とともに、珍しい挿絵をまじえて紹介する。江戸期の雪国百科全書¹⁾。

この紹介文だけでも、ヴァナキュラー文芸の要素が確認されるであろう。ウェルズ恵子氏の整理を借りて言えば、民衆の生活の一部として共感され得る一定の普遍性を持ちながら、かつ限定された時空、ある程度特異な社会的文化的諸要素を持った文芸作品²⁾。『北越雪譜』はそのひとつとっていいだろう。

しかし、江戸板本^{はんぽん}である『北越雪譜』は、地方人による自地域の文化・風俗の記録とその表現として片付けられない複雑さを持っている。拙著『雪国を江戸で読む～近世出版文化と「北越雪譜」』で明らかにしたように、この本は、地方文人の牧之の提案に対して、都合5人の中央の職業作家が代わるがわるの関わり、その凡そ40年にわたる交流・交渉・協働の結果、最終的にこの形で編まれた商業出版である³⁾。この企てに関わった作家とは、その順に、山東京伝（1761-1816）、曲亭馬琴、岡田玉山（1733-1808）、鈴木芙蓉（1752-1816）、そして山東京山。また、十返舎一九（1765-1831）も牧之から雪国ネタの提供を受け作品に用いているから、間接的にはこの「雪国の本」づくりに関係していることになる。これらの顔ぶれだけを見ても、江戸後期の文芸潮流の中で雪国の民俗が相当気になるものであったことがわかる。

では、『北越雪譜』とその関連史料はヴァナキュラー文化研究に何を提供することができるのか。私がこの稿で示したいことは、次の3点である。まず、この本が生まれる過程は、既存文芸がその関心の視野をヴァナキュラーなものにも広げるといふ歴史的な文脈の中で捉えられ、牧之と京伝以下との交渉は、地方の知識人と中央の職業作家が繰り広げたインターアクションの具体例として研究の価値があること。2点目は、この都鄙文人間のインターアクションにおいて、メインストリームの文芸がヴァナキュラー的材料を用いて本を作ろうとした場合の構想の多様さ、そして作品の性格づけに関する豊かな議論の存在である。ここでは、特に、作家たちの大きな関心が地方民俗を「雅俗」の軸においていかに配置するかであったことに注目したい。換言すれば、ハイカルチャーとポピュラーカルチャーのバランスへの配慮が焦点である。さらに、3点目としては、牧之と京山による具体的な本づくりは、商業出版におけるヴァナキュラー要素の「演出」あるいは「加工」を豊富に例示することを述べたい。辺境の環境や習俗を描く本を中央の一般読者を対象とする出版物として成功させるため、制作者側はどんな意識と技術を持っていたか。それをあぶり出してみようと思う。この考察は、ウェルズ恵子氏の研究が指摘するところのグリム童話上の「赤ずきん」民話の改編などにもつながる作業だろう⁴⁾。総じて言えば、この小論の目的は、『北越雪譜』が生まれる過程は「民俗」を表現する文芸の企ての、その19世紀初期の日本の例として豊かな価値があることを示すことである。

このような議論を可能にしているのは、この雪国の本の出版をめぐる行われた越後の牧之と江戸・大坂の職業作家との文通書簡が史料として遺っているからである。中心は曲亭馬琴と山東京山がそれぞれ牧之に宛てた合計30通の手紙である。本稿では『鈴木牧之全集』に収録されたこれらの書簡を主な資料として分析していく⁵⁾。

2 雪国への関心 ― 牧之、そして中央作家たち

江戸時代の文芸と学問において、地方の習俗や自然環境はさまざまな書物で取り上げられているが、それを大雑把に整理すると以下のようなだろう⁶⁾。

まずは、日本の構成要素としての各地方の情報をまとめていこうとする知的記録の動き。中国明朝の百科事典をモデルにした寺島良安の『和漢三才図会』(1715年刊か)は日本の六十六か国の基礎情報を盛り込む。一方、地方では詳細な地理歴史情報を地誌という形で編纂する動きが起きる。越後の例は「越後名寄」(1756年成立)である。さらに風土記や風俗帳と呼ばれる地域の記録は、一部は大名の領地行政とも絡まって郡レベル、村レベルでもまとめられる。江戸の屋代弘賢が1817年に「諸国風俗問状」というアンケートを印刷し全国の同好の士にあてて発したのは、この時期の学識者の地方文化への興味の高まりを象徴する出来事であった。

紀行文を通じて地方への興味は深まっていった。俳諧の世界では芭蕉の『奥のほそ道』(1702年刊)が大きなインパクトを与えたことは言うまでもないし、また学者や医者などの紀行文も一部は刊行されて広く読まれた(貝原益軒や橘南谿などのもの)。文人墨客を志すものは風雅の旅に出て詩歌を詠み、また博物学や地理・風俗に興味を持つものは辺境に赴き記録を遺す。それらが写本で知識人に流布した。津村宗庵の「雪のふる道」(1789年成立か)は江戸文人による雪国越冬体験レポートの第一号である。

庶民の興味を惹きつけたのは図会ものと呼ばれるビジュアルな出版物である。街道や宿駅が整備され、土地の名物や各種の遊興も発展し、庶民の間に旅ブームが起きる。それを背景にして、『都名所図会』（1780年刊）を嚆矢として各地の名所案内が刊行され、それは庶民の巡礼ルート of 観光ガイドにも発展していく。さらにスピニアウトして日本各地の名産品の生産現場を絵で見せる『日本山海名産図会』（1799年刊）のようなガイドブックさえ生まれた。

こうした動きの中で大衆娯楽である江戸戯作本にも地方ネタが使われるようになる。滑稽本では、万象亭の『田舎芝居』（1787年刊）で実験が始まり、一九の『東海道中膝栗毛』（1802-14年刊）などの道中もの大ヒットがそれを確立した。その後、式亭三馬は『浮世風呂』（1809-13年刊）で笑いを取る挿話を組み込んだり、また、馬琴は『八犬伝』ほかの読本で異界としての地方を舞台に使い、その習俗等を小説に利用している。あとで見ると、雪国越後はこれらの戯作本によく使われる舞台となった。江戸の人々にとって距離的には近く、しかし気候的に大きく異なる、すなわち交流可能な異界という側面があったからであろう。

さて、その雪国越後にいた鈴木牧之は中央の文芸作品における地方や辺境への関心にどう反応したか⁷⁾。

豪農商の家に生まれた彼は、父親の影響で俳諧を始める。それは当時の地域の旦那衆にはほぼ必須の教養であった。また画を習い、漢詩の基礎も身につけた牧之は地域の文化サークルの若きリーダーとして活動していくようになる。大規模な俳諧コンテストの開催（1797年）やその入賞作品の出版に関わったり、また、江戸への旅行（1788年）、伊勢・西国巡礼（1796年）等で都会や各地の文人と交流し、ネットワークを広げていく。各種著作のトレンドを学び、外の世界を知り、そして、文通や面談で問答を繰り返すことで、おのが住む地域が雪国としてどんな関心を集め、文芸上どんなポテンシャルを持っているかを考えるようになったと思われる。

自分の提供する画や説明文を使って有名作家が雪国の本を書いてくれないか。牧之は大胆にもその問い合わせを江戸の超人気作者であった山東京伝にしてみた。どういうやりとりで文通が始まったか不明だが、牧之の雪国の本の可能性打診に京伝は悪い反応をしなかったらしく、1798年の春、京伝の手元に相当量の画と文章、それに雪具の雛型（小型模型）などが届いた。それはかなり京伝の興味をそそったらしい。京伝は返書の中で、牧之の画で「まのあたり（に）御地之風俗ヲ見候様」^{みそろうよう}「北越之雪（がまるで）机上にふりつむが如くおぼえ申候」^{もうしそろう}などと書いている。そして、これを使って本を「いづれ梓行」したいので、その際は「校合願上候」^{きょうごうがいがいあげそうろう}、すなわち補助的な地位ながら共著者として出版に参加してほしいと牧之に気を持たせる。ところが、京伝による執筆は進まない。督促をした牧之に対して京伝は、仮題を『北越雪話』とする企画を提示はするが、一方で版元が喰い付かず、著者からの費用負担（入銀）が50両もあれば、と言われていると答える。「家業第一」をモットーとする在郷商人の牧之は、文芸趣味への多額の出費を厭い、そのため『北越雪話』企画は自然消滅となった⁸⁾。

京伝がだめなら、と牧之は馬琴に問い合わせる（おそらく1801年）。馬琴も興味を示すが、しかし、一時は師と仰いでいた先輩京伝がやりかけた企画を取るわけにはいかないと言って辞退。ただし、他に何か面白い材料があれば送ってほしいとし、牧之を越後の情報提供者者としてつないでおこうとした。二人の文通は牧之の最晩年まで続く。

数年後の1806年、牧之は大坂の画家、岡田玉山にアプローチをする。現存する1807年の書

簡によると、牧之からの材料サンプルを受け取った玉山は、さっそく版元候補と相談。話は即決となり、出版を目指して動き出し、牧之は再び雪国の風景・風俗を画説にまとめ始める。玉山が本の指針を示したことが同書簡でわかるものの、肝心の内容は別便であったため不明のままである⁹⁾。牧之の草画制作がどこまで進んだかわからないが、この大坂での出版計画は翌年の玉山の死で潰えてしまう。

一方、江戸の京伝の手元に残った牧之の草画類はどうなったか。知的財産権など確立されておらず、まして超売れっ子作家に対して提供した材料の返却を求めることは難しかったであろう。どうやら京伝は自分の小説の中で利用したようだ。1804年の『優曇華物語』や1807年の『梅花氷裂』^{ばい か ひょうれつ}などの雪中の挿画や描写にその気配が感じられる。さらに、あわよくば牧之の材料をまるごと弟・京山の作品として出版するという企てさえ行った形跡がある。1810年刊行の京山の読本『鶯談伝奇桃花流水』^{わしのだんでんきとうかりゅうすい}の巻末広告に「近刻」として「北越雪中図会 山東京山著ならびに蔵版」とあり、つづいて「この書ハ作者雪中に北越にありて作り」と説明されている。もちろん出版はされていない。戯作デビューからまだ3年の京山に箔をつけるための虚偽広告であることは間違いないが、しかし、材料提供者に断りもせず、さらに越後など旅行したこともない京山なのに、著者自身の雪中体験に基づいて書いたものという触れ込みは大胆だ。万が一出版されていたら、江戸文人社会で「炎上」したかもしれない¹⁰⁾。

そんな山東兄弟の画策など知らない牧之は塩沢で家業に精を出していたが、1812年の秋、江戸からやってきた絵師・鈴木芙蓉と交遊する機会を得て、再び出版打診を行う。これは、中央の文人墨客が地方を遊歴し、各地で文芸愛好家などから接待を受け、また書画を買ってもらおうという、当時の都鄙文化交流の典型的なパターンであった。芙蓉の興味を受けて牧之は筆を揮い、かつ出版に向けた協働の可能性をあたる。芙蓉は許諾。喜んだ牧之は、また草画・草稿の作成に入り、江戸に戻った芙蓉にそれを送ったらしい。進捗状況を表す史料は見つかっていないが、このプロジェクトも芙蓉の死（1816年）で消滅する¹¹⁾。

牧之の5度目の打診は再び馬琴に行われることになる。上述のように、牧之は馬琴と文通を続けており、折にふれ越後の情報も書き綴っていたと思われる。牧之が馬琴の作品の中で越後の友、情報提供者として明記されるのは1818年刊行の考証随筆『玄同放言』第1巻。したがってその数年前からは特に交流が密になっていたと思われる。そして、1816年に京伝が急死。これが牧之に馬琴へ共同プロジェクト再考を促す機会をもたらしした。牧之は仲介者を経て慎重に申し出を行い、ひと箱もの草稿画と雪具模型などを送る。馬琴、それに応え、「京伝子既に黄泉の客となられ候へハ、誰に遠慮いたすべきよしもなし」と、牧之の依頼を受ける。

こうして馬琴が受託し、その指導下で牧之は精力的に草画を制作、また越後各地の「奇談」を収集すべく雪の中を47日間もの取材旅行に出たりしている。ふたりの文通はこの年、文政元年だけでも牧之から8通以上、馬琴からも7通（長文で計7万字超）以上という頻繁なもので、この年から数年間で牧之が馬琴に送った草画類は250点以上かと思われる¹²⁾。しかしながら、『八犬伝』などがヒットし、ますます多忙となった馬琴には牧之の材料を自分の思うような形でまとめていく時間などなかった。書名を『越後雪譜』として、自著に近刊広告も出し、またパートナーである牧之の宣伝も各所で行いながらも、結局、原稿は書かれないまま年月が過ぎて行った¹³⁾。

一方、この頃、『東海道中膝栗毛』の大ヒットで人気作家となっていた十返舎一九が、連作の道中もので越後路や信濃路も描いていた。牧之は草津温泉逗留中の一九と面談後、交流を持つようになる。1818年には一九が塩沢を訪れ、牧之は接待をしている。雪国の本の出版については既に馬琴の受託を得ていたから一九へ依頼することはなかったはずだが、奇説珍談を提供しているのは間違いない。雪の山中での熊狩りの図説や信越国境の秘境秋山郷への紀行文などを送付しているのが確認される¹⁴⁾。

牧之の最終パートナーとなる京山が雪国の本に関わって来るのは1829年である。しかし、1818年の馬琴の書簡が教えるところでは、牧之が京伝没後に京山と文通をしていたら京山から雪の本の出版のことを言ってきたので、それについて牧之が馬琴に対処の仕方を相談している。したがって私は、京伝が亡くなったことを知った牧之は馬琴を本命としながらも京山にもそれとなく打診したのだらうと推測している。それから10年が経過。馬琴の動きは全く停滞する一方で、京山と牧之の関係は1828年ごろにはかなり親密さを増しているのがわかる。そして、文政12年（1829）10月の手紙で京山は『越後国雪物語』という草双紙（合巻）を出版することを提案する（後述）。しかし、この時点ではまだ牧之の心は揺れることはなく、やんわりと辞退したようだ。

いったんは引き下がった京山だったが、1830年になると様々な方法で牧之の歡心を買ひ、また馬琴の人格を非難する手紙さえ送る。京山と馬琴は性格的に相容れず、京伝の死後は長く絶交状態。京山は馬琴を忘恩の輩と見ていた。京山に可能性を見た牧之は、馬琴に強く督促する手紙を送るが、返ってきたことばは、待てないのだったら「何方へでも別人に頼み呉^{いずかた}」というものだった。既に還暦を迎えていた牧之、ここで意を決し、馬琴への委託を解き、京山の手を借りて雪国の本を出版するべく動き出す。京山に敵愾心を持つ馬琴は材料の返却を拒んだため、牧之にとっては6度目となる草稿作成であった。

こうして京山が江戸においてプロデューサー役を担うことになり、雪国の本の企画は別の道を進む。京山の考えも当初の草双紙『越後国雪物語』から、次に絵入り読本と思われる『北越雪中図彙』に変わり、そして、最終的には自然・地理・民俗を融合させた総合誌的随筆の形で編まれることになった。京山がつけた書名は『北越雪志』であったが、出版間際には版元の意向で、先行して弘められていた馬琴の『越後雪譜』という題と結合されて、『北越雪譜』となった。その初編3巻が文溪堂から発売されたのは1837年。28歳の牧之が人気作家京伝に問い合わせをした1797年から数えればちょうど40年後のことであった¹⁵⁾。

3 雪国をどんな本に仕立てるか ～ 雅俗のはざまで

以上概説したように、牧之の問い合わせに応じた中央の作家は6人。一九は本を編む意図ではなかったと思われるが、京伝、玉山、芙蓉、馬琴、そして京山はそれぞれの思惑で、牧之が提供する材料を使って雪国をテーマとする本を出版しようと考えた。江戸や大坂から見れば異界とも言える雪の世界を商業出版という形でどう具現しようとしたのか。この節では、彼らの出版アイデアを分析する。その指標として用いるのが「雅俗」である。雪国という新奇のテーマを都会の人々の読み物にするにあたって、職業作家たちは雅俗の軸、すなわち伝統的ハイカ

ルチャーと当世的ポピュラーカルチャーの間で、どう出版物を位置づけようとしたのか、そこを見てみたい。そうすることで、風土・民俗を表現しようとする時の江戸板本の様式の多様性を示したい。

表1 「雪国の本」～中央作家の案

	史料	題名とジャンル	判型（書型）・分量	著者・校訂者・画工・版元
A	京伝書簡 寛政12年（1800） か12/1付	北越雪話 絵入読本 ¹	（半紙本か） 5冊 ¹	東都 山東岩瀬京伝著 北越塩沢 鈴木牧之校
B	玉山書簡 文化4年（1807） 2/7付	（北雪光景 ² ）	（半紙本か） 初編4冊	（浪華 法橋玉山編述並画？） （北越 鈴木牧之画並校合？） （浪華 秋田屋大野木市兵衛刊）
C	京山読本『鶯談伝奇桃花流水』 （文化7年〈1810〉）の巻末広告	北越雪中図会	（半紙本か） 5冊	山東京山著ならびに蔵版
D	馬琴書簡 文化15／文政元年 （1818）2/30付および5/17付	越後国雪中奇観 （図会物系か）	大本 全10巻、各40丁、 2編に分けて	（江戸 著作堂主人著か） （越後 秋月庵牧之校訂か）
E	馬琴書簡 文政元年（1818） 7/29付 および八犬伝巻末広告	越後雪譜 （考証随筆系か）	（大本か）	江戸著作堂老人著 越後塩沢鈴木牧之考訂
F	京山書簡 文政12年（1829） 10/21付	越後国雪物語 草双紙	（中本か） 2編、8冊、各5丁	越後塩沢 秋月庵牧之作 東都 山東庵京山校合 歌川国貞画
G	京山書簡 文政13年（1830） 9/19付	北越雪中図彙 （絵入読本か）	（半紙本か） 全2巻の初編を画25丁、 文25丁の計50丁で	北越塩沢 鈴木牧之著 東都 山東庵京山校合 （画は北斎や英泉を検討）
H	京山書簡 天保6年（1835） 9/15付	北越雪志 （言及なし）	（大本か） 全3巻	越後 鈴木牧之翁著 京山人百樹校 （画は京水、国直もか）
I	天保8年（1837）刊行本	『北越雪譜』初編 （言及なし）	大本 全3巻、計97丁、 うち18丁が画	「越後塩沢 鈴木牧之編撰 江戸 京山人百樹剛定 江戸 京水百鶴画 江戸書肆 文溪堂梓行」
J	天保13年（1842）刊行本	『北越雪譜』二編 （言及なし）	大本 全4巻、計109丁、 うち20丁が画	「越後塩沢 鈴木牧之編撰 江戸 京山人百樹増修 江戸 京水百鶴画 書肆 文溪堂發兌」

拙著『雪国を江戸で読む』382-383頁より（一部改変）

注1：文政12（1829）年10月21日付けの京山書簡による。注2：玉山書簡で言及されている牧之送付資料の名前

表1に史料・刊本に現れた中央作者のアイデアを若干の推測を含めてまとめた。まず簡単にこの時代の書籍の判型（書型）と「格」の連動について触れておかなければならない。最も格が高いのは「大本」で、これは美濃判紙を袋綴じにしたものだから凡そ縦27^{しよけい}横18^{おおぼん}のサイズ。この半切りサイズが「中本」、さらにその半分が「小本」。現代でいえば、それぞれB5判・B6判・B7判ほどのサイズとなる。これとは別に半紙を袋綴じにしたものが「半紙本」で、「大本」と「中本」の間となる。凡そA5判のサイズ。基本的に「大本」は高尚な本、すなわち「雅」度

が高く、「中本」は草双紙、つまり絵が主体で、文章もかな文字が多い大衆本。「半紙本」はその中間に位置し、ふりがなが付いて綴られた文章に挿絵が飛び飛びに入るといようなものが多い¹⁶⁾。

それでは、京伝について考察する。1797年に牧之から草画類を受け取り、「いずれ出板」したいと答えた京伝は、1800年に進捗を問われて簡単なアイデアを返事に認める。題名を『北越雪話』とし、分量は5冊、「東都 山東岩瀬京伝著」「北越塩沢 鈴木牧之校」という役割で出そうというものだった。この時点で京伝に明確な案があったわけではなさそうだが、彼の構想については返書中にいくつかのヒントがある。まず「此節忠臣水滸伝^{このせつ}ト申^{もうす}十卷之読本ニ取懸^{とりかか}」^{しきのゆきかい} っているといるが、これは京伝が1791年の筆禍事件以降陥ったスランプから、従来の洒落本や黄表紙といった戯作ではない新機軸の著作を目指した時期にあったことを示している。軽妙洒脱な漫画的読み物で江戸大衆本のスターになった京伝であったが、この時には岐路に立って「雅」の方向へ向き始めていた。試行錯誤のひとつが1798年に刊行した『四季交加』という江戸の市中の季節ごとの風俗を描いた絵本だ。斬新な企画ではあったが、全く売れなかったらしい。しかし京伝は風俗考証を随筆の形で追及することにし、1804年の『近世奇跡考』、そして遺作に近いものとなった『骨董集』（1814年刊）を生むことになっていく。一方、それよりは俗に近い方向性をもって進めたのが『忠臣水滸伝』のヒットで波に乗った読本（当初は「絵入り読本」とも呼ばれた）で、漢文の知識がなくても読める「国字小説」であった。いわば、京伝の著作活動は「雅」と「雅俗半ば」の両路線上にあったと言える。

雪国の本に関しては、私の推測では、京伝が考えていたアイデアがわかるのは京山の名前を出してある『北越雪中図会』の近刊広告である。前述のように、1810年刊の京山の読本の巻末に出したもので、そこに主な内容が紹介されている。それは、①雪中での熊猟の図と説明文、②雪中に生きる珍しい昆虫や草花、③越後縮（名産の織物）を雪上に晒す図と説明文、④そり、かんじき、雪帽などの雪具類、⑤越後の雪が降り始めてから融けるまでの様子、などの「さま／＼な奇談」だと言う。京伝と京山は牧之が送付した材料の中から江戸の読者に「売り物」にできる雪国のトピックをこう抽出したのだろう。広告では判型やジャンルの情報はないが、京山が後年、京伝の構想は「絵入読本」だったと牧之に言っているから、半紙本であったか。そうすると本の格的には「雅俗半ば」に位置するものと考えられる。

京伝の構想に比べると、岡田玉山と鈴木芙蓉が考えた雪国本は一層「雅」の要素が強いものだったであろう。玉山はそのベストセラー『絵本太閤記』で知られるが、この雪国本構想について直接参考になるのは1806（文化3）年に出版している『唐土名勝図会』^{もうごし}初編である。清朝中国の総合ガイドブックとも言える豪華本で、玉山は挿画だけでなく本文も担当する主著者であった。初編は概説の他、北京と直隸地をカバーし、それだけで6巻、計836頁という大分量。これを合わせて全6編で中国全土を網羅するという超大型企画であったが、結局、初編のみの刊行で終わった。判型はもちろん大本、そして漢文の序、引用書目録があり、本文は和文ながらも漢熟語が多く、ただし広い読者層を狙ってふりがなはふってある。各巻に掲げられている献辞により、この出版は木村兼葭堂（1736-1802）の遺志を継いで行ったものであることがわかる。言うまでもなく、木村兼葭堂は当時の大坂の知の巨人で文人サロンの主宰者、日本最大の私立図書館・博物館のオーナーであったから、その蔵書と情報力をもとにしての一大出版プロジェ

クトだったと思われる。そして、この初編が刊行したころに玉山に届いたのが、牧之の問い合わせだった。

他のケースと異なり、玉山にはすぐに版元が飛びつき、牧之の材料を使って雪国の本を出したいと言ってきた。それは秋田屋市兵衛という老舗書肆で、どうやら経営難にあったらしい。玉山の書簡中に、秋田屋が「此一本にて不如意の身上再び建立」したいと語ったとある。秋田屋が『唐土名勝図会』プロジェクトには入っていない（計12書肆が参画）ことも考えると、どうやら新興勢力に抜かれつつある秋田屋が玉山に以前からアプローチをしていて、そこに飛び込んできた雪国本のアイデアに即オファーを出したのではないか、そんな推測が成り立つ。もしそうだとすると、玉山と秋田屋市兵衛が構想していたのは、『北越名勝図会』とでも題されるような、雪国の景色や名勝地・歴史的文物の図説、また民具・民俗的装束などの図譜、すなわち図鑑的解説本だったのではないだろうか。参考する文献は日本一のものが兼葭堂の書庫にあったはずである。『唐土名勝図会』よりは格段に小規模になったであろうが、体裁としてはそれに準ずるものが考えられていたのではないか。玉山は牧之に、まず3-4冊の前編を出版し、雪の少ない西日本方面をターゲットにして売り込みたいと言っていた¹⁷⁾。

鈴木芙蓉がもし進めたらどんな雪国本になっていただろうか。芙蓉は儒学・漢詩の素養を深く持つ江戸南画（文人画）の第一人者であった。刊行が確かめられているのは、中国画の画集や漢文紀行文での挿絵などで、和文で綴ったものはない。想像の域を出ないが、仮に芙蓉が牧之の材料をもとに本を編んだとしたら、山水画的な雪景色やユーモラスな子供たちの雪遊びなどを中心とした雪の画集になっていたのではないか。漢詩もふんだんに挿入され、極めて「雅」的なものになったと推測する。その分、果たして版元がついて商業出版として成就したか疑問でもある。

一方、雪国の材料は江戸の草双紙になることもあり得たし、牧之が提供するものは一部は実際に利用された。今度は「俗」作品の試みを見てみよう。

牧之に関わりはないと思えるが、最も「俗」的な雪国描写は式亭三馬の『浮世風呂』にある。江戸下町の銭湯に越後帰りの俳諧師が入ってきたところから雪国話が始まり、やはり越後の冬を過ごした経験があるという鳶と侠客の二人が彼らの雪国体験を披露する、という仕立てだ¹⁸⁾。わずかな地の文以外はすべて会話で成り立っていて、大げさな、一部は荒唐無稽な越冬談が展開する。ただし、そこに盛り込まれたネタの多くは江戸人が関東平野の向こうの雪世界の何に興味を持っていたかを示すものとして参考になる。そして、そのいくつかは、『北越雪譜』にも表れる題材である。すなわち、大屋根を越える積雪、そのため隣家とは雪中に掘った横穴で行き来すること、雪道を旅する時は懷中に非常食として握り飯を携帯すること、また、その利用や雪女（幽霊）談など。当時の雪国情報をもとに、この滑稽話は作られたということだろう。

草双紙で地方を江戸人に紹介する作家の筆頭は十返舎一九である。前述のように、一九は次次・喜多コンビの膝栗毛シリーズのほかに、『方言修行 金草鞋』^{むだしゅうぎょうかねのわらじ}全25編を綴っている。その第8編（1816年刊）が「越後路之記」である。ただし、『金草鞋』は膝栗毛のようなドタバタ珍道中話ではなく、各地の風景や名物を主人公と土地の人々のやり取りを通して紹介する旅行ガイド的な合巻であって、「俗」度は多少減じている。それが、さらに進むのが1820年の『滑稽旅賀羅寿』^{こっけいたびが}初編である。越後から信濃を巡るこの作品では一九自身が主人公となり、各地をレポー

トする仕立てとなっている。現代で言えば、トラベルミステリー作家の旅のエッセイに近いかもしれない。この本の「附言」で一九は、『旅賀羅寿』は「(自分の旅の) 実事のめずらしき事、おもしろき事、おかしき事を、ありのままにするすもの」であって、膝栗毛のような「滑稽にもあらず」、『金草鞋』のように「旅行する人のために」書いたものでもない、と言っている¹⁹⁾。つまり、一九も旅先で見聞する民俗をノンフィクション的に書き遺そうという意志があったのである。ただし、彼は京伝・馬琴・京山が試みたように、文献に当たり考証を加えたりしてそれを「雅」の世界に近づけることはしなかった。一九の試みは、草双紙、判型でいえば中本という枠の中、そして彼の得意客である一般大衆が買ってくれるか、もしくは貸本屋で借りてくれるという条件を離れることはなかった。

その『旅賀羅寿』のための旅行(1818年)で、一九は越後塩沢に牧之を訪ねて数日逗留している。作品では牧之の案内で残雪のある山奥に熊猟を見物に行ったことが6頁に渡って描かれ、画にも文章にも牧之が一九と並んで登場している。前述のように、雪中の熊猟は1810年の京山の読本に現れた広告にあるトピックのひとつであるから、江戸の作家の注目する雪国ネタであったのは間違いない。完成した『北越雪譜』においても熊は重要な話題で、初編に3条の挿話があり、分量的には第5の地位を占めている²⁰⁾。ただし、『旅賀羅寿』が描く一九自身の熊猟見物は事実ではないと、私は判断している。なぜなら、馬琴から牧之への手紙によれば、塩沢滞在中に一九が牧之に雪中の熊猟のことを戯作に載せてくれると約束したので、牧之はその様子を書いて送ったことがわかるからだ²¹⁾。つまり、この本に現れた熊猟の挿話も、牧之が材料を送り中央の職業作家が一般読者をターゲットに書いた民俗描写の可能性が高い。そして、この手紙に表れた馬琴の意見が非常に面白い。馬琴は一九の人柄については高評価で、「衆人に嬉しがられ」る性格なので「遊歴の先々ニても餞別の所得格別」だろうと羨んでいる。一九は「天晴の戯作者」ながら、ただし、「文人のかたには遠し、学者のかたにはいよ／＼遠し」という作家である²²⁾。したがって、牧之の名前が彼の「戯れたる草紙に、はじめより…流布」してしまうと、世の中の人々が牧之も「たはぶれたる浮世人」だと思ってしまうかもしれない²³⁾。馬琴はそう述べて、この時点では自分が企画する『越後雪譜』のパートナーであった牧之に俗人イメージが付いてしまうことを嫌っている。もう一点推測できることは、雪中の熊猟という大切なトピックが戯作に使われてしまうことの嫌悪感である。馬琴はそれを和漢の文献を当たって考証する価値があるトピックだと思っていただろう。

馬琴は「戯れたる草紙」と言っているが、『旅賀羅寿』の描写は、かなりノンフィクション的であり、われわれが江戸合巻という用語からイメージする慰み物の小説とは異なる。一九・牧之の熊猟の挿話は、いわゆるマタギの熊猟を実見したルポルタージュのような記述となっている。おそらく江戸の戯作本の幅の広さは、現代のマンガのようであったのかもしれない。様式としては画が紙面の中心となる廉価本ではあるが、読者のどんな興味に呼応するものであるかはさまざまである。言い換えれば、この廉価本を手にする大衆の読書欲の対象が広がっていたということだろう。庶民の気軽な学びの媒体としても草双紙は機能していたのだ。

草双紙のこのような多様化を背景にして、牧之の雪国材料をそっくり合巻にしたらどうかと提案したのは、1829年の京山である。『越後国雪物語』と題し、牧之を主著者にして、京山は補助(校合)となり、さらに売れっ子絵師の歌川国貞に画を描かせるという驚倒のオファーであっ

た。これは、次に述べる馬琴の『越後雪譜』企画が完全に停滞していることを知り、また兄京伝の『北越雪話』も版元の興味を惹かずに没となったことを踏まえての、ある種の打開策提案であった。京山は、京伝の企画は絵入読本だったので「手重く」「雑費も余程かかり」「作もむつかしく」「つい／＼延引」となった、と分析。したがって、より簡便な「草双紙にいたし出板」すれば売れるだろう。全部で40丁(80頁)を前編・後編各4冊にして出版と言っている²⁴⁾。5丁が1冊をなして、その4冊を合わせ綴じて1編とする典型的な合巻スタイルである。スピードとしても「雅」の本の出版とは全く違っている。牧之が冬ごもり中に草稿を綴ってくれば、江戸で京山と国貞が画と文を仕上げ、さっと製版・印刷し、次の正月前には店に並ぶだろうと言う。一年未満の工程である。そして、牧之が主著者となる上、さらに費用負担も一切いらないと書いている。しかし、牧之は提案に乗らなかった。簡易な草双紙にするという案が、馬琴に期待して追い求めてきたものと差がありすぎたのかもしれない。

では、その馬琴はどんな構想を持っていたか。おそらく馬琴こそが、雪国本の企画を雅俗軸の上でどう位置づけるか最も深く思考した作家である。そして、それは牧之という素人作者との対話があった故に深められたと思われる。そのことがよく観察できるのが、文政元年(1818)7月30日付の馬琴書簡である。馬琴の指導下で草稿を準備して行こうとした牧之は、先便で、雪に関連した挿話についても「和漢の故事」を引用しながら進めなければなりませんね、と確認したようだ。つまりそれまでの文通で、馬琴が求めているのは雅的な要素だと思ったのだろう。それに対して馬琴は、自分が構想しているのは「随筆などちがひ、俗へちかき」本だとして、故事や漢文が多すぎては「売捌之障り」になると述べる。この雅俗を「斟酌」することが最も大事であり、そのバランスは出版の時期を見計らって決める必要があると言う。そして、原則と今のトレンドについて牧之にこう講釈している。

十分の内七分ハ俗、三分ハ雅というものハ、いつもうれ申候。十分の内七分雅三分ハ俗といふものハ多くハうれ不申候。…十分の内十分雅…一向うれ不申候。…乍去…俗斗ニては又うれ不申候。当時ハ五分雅五分俗なるもの、はやり申候。此俗の内にも雅あり、雅の内にも俗なけれハ、平等には売れ不申候。これをあてがふといふ也²⁵⁾。

すなわち、雅3俗7はだいたいよく売れるが、反対(例えば「随筆」)はあまり売れない。雅が10なら全く売れない(「諸家の詩、文章など蔵板もの(自費出版の類)」)。また俗ばかりでも売れるものではない(「小冊の外ハ」として滑稽本などは例外とする)。そして現今の売れ筋は雅俗半々の本だと観察している。肝心なのは俗の中に雅の風、雅の中に俗の要素を加味して広く読者にアピールすることである。

馬琴はこのように出版トレンドを見て筆を執ることの重要性を共著者となる牧之に強調する。「著述はあてがふて認候が第一の手段」「おのれ一人りおもしろがりてハ売物ニならず」「世上の人の嬉しがるを第一にせねバ、書肆に損あり」。つまり世の中に合わせて読者の喜ぶように作品を制作することが第一原則であると言っている。

ここに見えるのは、馬琴が自らを「板本の作者」と規定する職業作家としての強いアイデンティティである。同年2月の手紙ではこう述べる。「板本の作者は書をつゝるのみにあらず」「作

者の用心ハ、第一に売れる事を考^ええ、出版コストや損益分岐点も「胸勘定」しなければならぬ。「その時々^{じんき}の人気をはかり、雅俗の気ニ入る候様に軍配」するのが「板本の作者」の仕事なのだと²⁶⁾。成熟した読書・出版文化の中で、常に読者の心を掴み、版元と共榮すること。それがプロの作家だというわけである。

そうは言いながら、馬琴が考えていた雪国本はかなり雅的で売れにくいものだったようだ。手紙を読む限り、数軒の版元にアイデアを話していることがわかるが、誰も積極的な反応は示さなかった。牧之への提案のはじめは、仮題を『越後国雪中奇観』とする大本。1巻あたり40丁、前編・後編5巻ずつ、「諸国の名産図会にもまされる大著述」と書いている。その後、題を『越後雪譜』と改め、大本全6巻で、各巻60～70丁、そのうち画が15～16丁と企画している²⁷⁾。単純に計算すれば、文章を6～7頁読むと挿画が見開き2頁で現れるような配分となる。近刊広告を人気の長編読本『南総里見八犬伝』と考証随筆『玄同放言』に出していて、その後者にはこうある。

越後雪譜 大本 全六巻 近刻 江戸著作堂主人著 越後塩澤鈴木牧之考訂

この書ハ、北越冬春の間、雪中の奇観、雪舟、橇^{ソリ}、スカリ、スンハイ、雪下駄等の圖説、良賤冬簞^{フユコモリ}の爲^{テイタラク}体、大雪吹^{オホフブキ}、雪顔^{ナダレ}、雪吹^{フブキタフ}仆れの奇談^{チマミ}、縮織^{チヂミ}る体、雪中禽獸^{キクワン}を捕る機関、灵山名所古戰場まで悉皆画図にあらはす。都下の婦幼ハさら也、西南薄雪なる地方の人ハ、特に視聴をおどろかすもの多かり。未曾有の珍書といはまし²⁸⁾

「都下の婦幼」の目を驚かすと書いてはいるが、明らかに知識人向けの雪国図鑑に見える。もし出版されたなら、『玄同放言』よりはビジュアルであったかと思われるが、馬琴特有の銜学的な文章に満ちたものになったのではないだろうか。零落した武士・滝沢興邦が戯作者・曲亭馬琴となって、この時までには27年。人気と収入のためには大衆の慰み物として消費されるような物語本を引き続き綴らなければならないが、それだけでなく、学者・文人にも一目置かれるような知的な書物の著者になりたいという願望が強かった。雪譜はその価値を持つ題材だと判断したのだろうが、結局それが故に、長編シリーズを抱えた人気作家としての多忙な執筆生活の中では、何も書けずに時だけが進むという原因となったのであろう。

京山も雅俗軸で揺れている。上述したように、はじめは草双紙を雪国本プロジェクト停滞の打開策として提案したものの、実際に牧之から委託を受けると、かなり修正・調整を行っていく。文政13年（1830）9月19日付の手紙では、読本の形式（半紙本）にしようと言い、提案した企画は『北越雪中図彙』前編2巻、分量は計50丁で画と文章が半々の構成である²⁹⁾。おそらく『北斎漫画』のヒットが念頭にあったと思われる。さらに牧之との文通が進み、材料が集まってきて、結局は判型としては大本になり、内容的には随筆とも地誌とも民俗誌とも呼べそうなものに編まれていくことになる。牧之との協働の中、どう雅俗が安排されて雪国が演出され、『北越雪譜』となったか、次節でそれを考察してみたい。

4 雪国の演出

牧之が送ってくる雪国世界の画は確かに見るものを圧倒し、豪雪の説明にも驚かされる。しかし、それだけでは売れる本は作れない。馬琴も京山もそう考えたことが手紙から判明する。馬琴は「殊に雪の画はさみしきもの」で、読者の気分を高揚させるものではないと言い、京山も「雪の図、雪の事ばかりにては、見るものなづみ」、すなわち先を読もうと思わなくなる、と述べている。したがって、雪の画や解説の「その間へさまざまなる奇談をまじへ」ること（馬琴）、「雪によせて余事のはなしを」書き加えて「見ておもしろきやうにする」こと（京山）が必要だとする。そして、そのアイデアの例としては、「越後の湊々の遊女の図説等」（馬琴）、「熊に助けられた話」「雪中の正月」「雪中の婚礼」など（京山）をあげている。要は「雪につけての珍説奇談」（京山）をいかに盛り込み、配置して、読者を惹きつけ、かつ飽かさなさいかということである³⁰⁾。

では、刊行された『北越雪譜』はどんな挿画や説話を並べて雪国を見せているのか。初編3巻は合計97丁、そのうち18丁が画で、31点の挿画を載せる。また、文章は、京山による漢文の序と京水の挿画についての注のあと、それぞれ見出しを付けた長短69条の説話で構成されている。京山の漢文は本の格式と「雅」のデモンストレーション。続くのが口絵（図1）で、豪雪に生きる人々の姿や珍しい雪具を見開きで見せる。彫りにも刷りにも力が入っているのがわかる。その次が目次、そして本文が始まり、2度ページをめくると現れるのが雪の結晶の挿画（図2）となっている。なぜか。京山は手紙でこう述べている。「すべてよミ本など見る人は、まづ絵の所を見るもの也。或ハ目録（目次）をも見る也」、そしてこれは貸本屋を利用する場合に顕著で、まさに『北越雪譜』はその客をターゲットにしているのだと言う³¹⁾。上巻の口絵、そして目次、それに続く挿画がどれだけ意味を持っているか、京山はわかっていた。それは中巻、下巻との挿画の量の違いにも表れている。上巻が7丁半（13点）であるのに対し、中巻5丁（8点）、下巻は5丁半（10点）と減じている。



図1『北越雪譜』初編巻之上より「掘除積雪之図」「屋上雪掘図」「縫を穿て雪行図」「雪中歩行用具」
(国立公文書館デジタルアーカイブ)

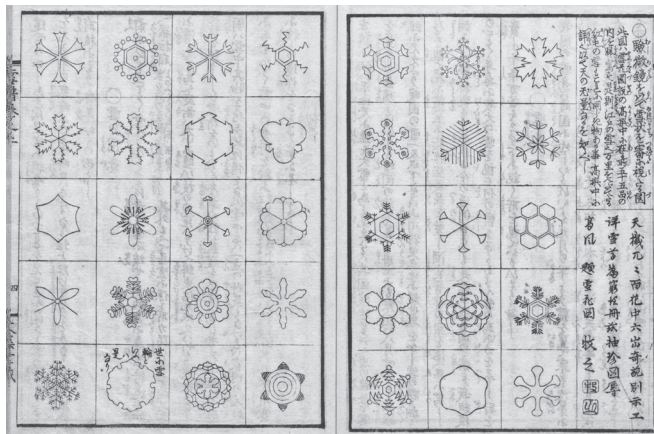


図2『北越雪譜』初編巻之上より「験微鏡を以て雪状を審に視たる図」
(国立公文書館デジタルアーカイブ)

次にトピックの種類、流れ、分量はどうなっているかを見てみる。まず開巻第1条から14条まで（以下①～⑭とする）は雪の気象と塩沢地域の豪雪事情がトピックであり、その分量は計192行（1頁12行のレイアウト）。それから熊に関する話が続き（⑮～⑰の3条だが130行もの分量）、⑱「雪中の虫」（16行）⑲吹雪（64行）⑳「雪中の火」（27行）㉑「破目山」（11行）㉒～㉔と㉗が雪崩（116行）などとなっている（上巻は㉒で終わり㉓から中巻）。⑱⑳㉑は箸休めの挿話とも取れるが、製本上の丁合わせかもしれない。以下、中・下巻での主要トピックを拾うと㉒～㉖の越後縮（181行）、㉘秋山郷（146行）、㉚～㉝鮭（210行）などとなっている。注目すべきは縮と鮭の扱いである。いずれも江戸・上方から見た越後の特産品であって、その生産現場・漁獲方法を雪と絡めて紹介しているが、それとともに、関連する悲劇などにも多くの行を割き、また挿画を組み込み、読んで面白いものに仕立てている（㉓「御機屋の霊威」40行〈図3〉、㉝「漁夫の溺死」41行〈図4〉等）。これが、「雪によせて余事のはなし」を加えるという京山の編集方針を具現するものであろう。



図3『北越雪譜』初編巻之中より「御機屋の霊威織女
発狂の図」(国立公文書館デジタルアーカイブ)



図4『北越雪譜』初編巻之下より「絶壁搔網の図」
(国立公文書館デジタルアーカイブ)

異界の民俗について書く時、語り手を読者に対してどういう立場に置くかも重要である。大きく分ければ3パターン、つまり、1) 読者側の世界から異界を訪れた旅行者・取材記者によるルポルタージュか、または、2) 文献や資料を読み解く研究者のレポート、あるいは、3) 異界のネイティブによる自らの地の紹介ということになるだろう。どの場合でも読者の世界に通じ、彼らに向けて書くことが必要である。今まで見てきたように、牧之の問い合わせで始まった雪国本プロジェクトはこれらのいずれにもなった可能性があるが、刊行された『北越雪譜』初編は牧之がネイティブの「老農」として江戸や上方の読者に語る雪国の本という体裁を取ることとなった(二編では京山のコメントが「ももきいわく百樹曰」³²⁾としてかなり挿入される)。全69条中、39条に「余」「我^{わが}〇」などの牧之を意味する一人称が見られ、彼の語りであることが明確にされている。京山は書簡中で、雪国の本は「雪国の人が作意(著作)いたし方、見物のうけもよろし」³³⁾いので、牧之の「自作」にするべきだと言っている³²⁾。京山が牧之を主著者に据えたのは、既に触れたように、馬琴との確執が生んだ特別オファーだった可能性も大きい³³⁾が、いずれにせよ、商業出版として成功させるためには、鈴木牧之という無名の雪国文人も演出する必要があった。

京山の手紙を読むと、そのためのいくつかの工夫が行われていることがわかる。ひとつは京山の作品を通して牧之の名前を弘めておくことである。1831年刊の合巻でその序文を牧之の名で「代作」している他、読本や合巻の巻頭に歌や句をやはり牧之の名で挿入している(馬琴も同様だが牧之の実作の句を用いている)³³⁾。1835年には絵草紙屋から依頼を受けた正月用錦絵への賛を牧之の名で書くことにし、これも「御名の弘め」のためと言っている。そして、牧之自身も出版物を通じて自分が有名になることを強く欲していた。

『北越雪譜』中では、著者牧之の教養をアピールする方策が取られている。まずは知識人の証明とでも言える漢詩能力。編集作業中の京山は、知人から雪景を詠んだ漢詩が持ち込まれると、それを牧之作として挿画の賛として入れることを思いつき、牧之に相談する。牧之も受け入れるが、ただし、詩の一部が雪国の實際を反映していないことを指摘している。これは牧之が地方文人としてかなりの力量を持っていたことの証左である。また、京山は牧之草稿になかった人物を登場させているが、それは学者などへのひとつの仕掛けであると説明している。その人物名がある故事を想起させ「千人に一人ハ」「牧之ハ仏書をものぞきし人ならん」と思うだろう、というのである³⁴⁾。

著者牧之の教養を最も印象づけるのは開巻部①～③の「地気雪となる弁」「雪の形状」「雪の深淺」だろう。学術的ともいえるこの部分は、現在多くの読者に江戸時代の地方文人の知識レベルについて驚きを与えるところである。しかしながら、私はこの3か条、そして挿画の雪の結晶図(図2)は、牧之の草稿にはなかったもので京山の加筆ではないかと判断している。理由としては、京山の書簡中にあがる牧之からの材料リストには見られないこと、両者の意見交換で触れられていないこと、越後の情報を全く含まない文献的知識であること、スタイルが考証随筆そのものであること、そして雪の結晶図を大名の私家版である『雪華図説』から謄写したのは江戸の京山・京水と考えるのがより自然であること、等である。ほかにも④⑧⑨「鮭の字の考」「鮭の食用」などにもまさしく考証随筆的、学術的説明があり、京山による執筆を強く疑わせる。

もうひとつの仕掛けは近刊広告である。『越後奇跡録』という題の5巻の書が牧之編撰・京山刪定で「近刻」と掲げてあるのだが、牧之はこの全く書く予定のない本の広告を心配した。す

ると、京山はこの広告は「人寄せのかんばん」であり、「牧之は外にも著述のある人と世界の人におもはせん」とするものだと言っている。このように、とりあえず表題だけを出しておくのを「書林ことばに縄張り」と言う教え、しかし、だからといって「是非著述して上板せねばならぬといふ事にも非ず」と業界の慣習を伝えている³⁵⁾。確かに江戸時代の本の近刊広告にはその後の出版が確認されないものが相当ある。

それでは最後に、雪国の老農が書いたものとして提供される『北越雪譜』は文章としてどのような性格を持っているか見てみたい。ひとつは、牧之の住む越後と江戸との対比である。特に③～⑥にはそれが顕著で、越後は「寒国」「辺境」「雪の為に…千辛万苦する」ところであり、江戸は「暖地」「繁華の都会」「雪の…勝望美景を愛」するところという二項対立関係で示している³⁶⁾。もともと牧之の動機が雪の世界のことを外の人に伝えたいというものだったから、彼の草稿自体が彼我の差異を強調していたと思われるが、京山による編集によってさらに明瞭に演出されているのではないだろうか。

文体的な特徴としては、この「辺境」の民俗の描写にあたって古風な、したがって、やや雅な感覚を演出していることが京山の手紙からわかる。初編の最後にある「雪に坐頭ざとうを降す」の条に関して、牧之と京山が原稿のチェックをした際のこと、土地の人間の会話に京山が「わぬし」「兎角どの」と書いていたことに対して、牧之は自分のところではそんな言葉遣いはしないので「おまへ」「兎角さん」と訂正するようにフィードバック。それに答えて京山は、そのような言い方は「俗なる今のことば」であって、雪譜全体の文章に合わないと回答。そして、古典の作品にも「山里の人のことばも雅言に記し」である、「是レ文法也」と主張している。つまり、忠実に現在の雪国の人々の会話を再現するのではなく、文章上の決まり事として、鄙は古風な感じで描くことが必要だったわけである。文体と語彙における雅俗のミスマッチは「学者の笑ひをとる事」になるとも書いている³⁷⁾。

5 まとめとして

18世紀後半以降、成熟する日本の読書文化と出版産業が新奇なトピックを追い求め、江戸文芸はヴァナキュラーな要素に可能性を見出す。そのひとつが雪国の民俗であった。一方、土地々々には、中央からの関心に自ら応えて発信しようとする文芸愛好家も育っており、越後塩沢の牧之は「雪国の本」の材料をまず江戸の超人気作家京伝に送付。そこから40年にわたって繰り広げられる雪国の本の出版を目指す都鄙文人コラボは、商業出版物としてヴァナキュラー文芸作品を成立させるプロセスとそこに絡み合う要素の複雑さを豊かに例証する。

辺境の特異な民俗・自然環境を描いて商業出版で成功させるために、当時の職業作家が最も配慮したのは「雅俗」バランスであった。それは出版を商業的に成り立たせるという要素だけでなく、作者自身の興味・能力・キャリア上の方向性、そして本の格や業界・文人仲間での競争・評価、また、市場のトレンド等、さまざまな要因が絡みあう考慮となっていた。歴史の中のひとコマが違っていれば、現在の『北越雪譜』がわれわれに映し出す江戸時代の雪国世界は、相当違う色合いで描かれた可能性もあり、また結局成立せず埋もれてしまったことも十分あり得た。

雪国の特異性を中央でアピールしようとするその試みは、すなわちオフセンターなものをセンターの言説空間と媒体・生産消費慣行の中で伝えようとする行為であり、そのための素材の選択、表現の加工、製品の形式化をとともなう作業であった。この稿で論じた馬琴や京山の見解、また編集上のテクニックなどは、おそらく近現代においても、新奇なサブカルチャー的アートや文化事象をメジャーな媒体で表現し売り出そうとする際のある種の「加工」と共通するものではないだろうか。

注

- 1) 鈴木牧之『北越雪譜』岩波書店 1978 年（以下『北越雪譜』）。2017 年版カバーによる。
- 2) ウェルズ恵子「はじめに」（ウェルズ恵子編『ヴァナキュラー文化と現代社会』思文閣出版 2018 年）viii 頁。
- 3) 森山武『雪国を江戸で読む～近世出版文化と「北越雪譜」』東京堂出版 2020 年。以下『雪国を江戸で』と略記。
- 4) ウェルズ恵子「ヴァナキュラー文化として『赤ずきん』を読む」（ウェルズ恵子編『ヴァナキュラー文化と現代社会』115-138 頁）。
- 5) 宮栄二・井上慶隆・高橋実編『鈴木牧之全集』中央公論社 1983 年。下巻「資料編」に「滝沢馬琴書簡集」（193-274 頁）「山東京山書簡集」（275-356 頁）。以下、それぞれ「馬琴書簡集」「京山書簡集」と略記。
- 6) 詳細は『雪国を江戸で』24-59 頁参照。
- 7) この点についての詳細は同書第 2 章参照。
- 8) 同書 114-126 頁参照。
- 9) 高橋実『北越雪譜の思想』（越書房 1981 年）99-100 頁に翻刻。
- 10) 『雪国を江戸で』127-134 頁参照。
- 11) 同書 153-158 頁参照。
- 12) 高橋実『北越雪譜の思想』138 頁。
- 13) 馬琴と牧之の交流・交渉は『雪国を江戸で』160-204 頁参照。
- 14) 同書 52-57, 243-244 頁参照。
- 15) 京山と牧之の交渉の詳細は同書 204-220 頁参照。
- 16) 和本の書型とジャンルについては、例えば、橋口侯之介『和本入門』（平凡社 2005 年）66-69 頁参照。
- 17) 牧之と玉山の交渉の詳細は『雪国を江戸で』135-152 頁参照。
- 18) 式亭三馬『浮世風呂』岩波書店 1957 年、249-255 頁。
- 19) 十返舎一九『滑稽旅賀羅寿』（早稲田大学図書館古典籍総合データベース wul.waseda.ac.jp/kotenseki/he13_04253）（2019 年 1 月 20 日アクセス）。
- 20) 『雪国を江戸で』324 頁。
- 21) 「馬琴書簡集」260 頁。
- 22) 同 251 頁。
- 23) 同 260 頁。
- 24) 「京山書簡集」288-289 頁。
- 25) 「馬琴書簡集」217 頁。
- 26) 同 201 頁。
- 27) 同 218 頁。
- 28) 滝沢解『玄同放言』（日本古典籍データセット codh.rois.ac.jp/pmjt/book/200020274）（2019 年 1 月 20

日アクセス）。

- 29) 「京山書簡集」 282 頁。
- 30) 「馬琴書簡集」 200 頁, 「京山書簡集」 313 頁。
- 31) 「京山書簡集」 325 頁。
- 32) 「京山書簡集」 296 頁。
- 33) 『雪国を江戸で』 196-199 頁, 245-284 頁参照。
- 34) 「京山書簡集」 338-339 頁。
- 35) 同 334 - 335 頁。
- 36) 『北越雪譜』 22-25 頁。
- 37) 「京山書簡集」 339 頁。

